

平成 26 年度卒業論文題目・要旨

みなべ町から見る梅産業

森 愛莉

本稿は梅産業や農家の現状と課題を把握し、調査研究を行うことで今後の梅産業発展の可能性について考察することを目的としている。梅産地は消費低迷や担い手の育成など多くの問題を有している。また同時に、個々の農家はその経営形態によって有している個別の問題も存在する。梅産業の発展のためには、行政と農家が梅産地や梅農家の置かれる現状を把握し、時代に沿った新たな農業形態や販売方法を常に模索していくことが必要である。

紀州備長炭生産を存続するために－後継者育成と原木林管理に着目して－

村田 諒

本稿の目的は、製炭業の歴史と形態、現代の取組の内容を分析することにより、後継者育成・原木不足の課題に直面する紀州備長炭生産の存続のために何が必要なのかを考察することである。農山村への移住・定住支援の充実等により、後継者育成は徐々に成果を出しつつある。地域ブランドとしての地位を確立した紀州備長炭の生産を存続していくために、択伐等の伝統技術の合理的な意義を見直し後世に継承していくことが求められている。

京扇子にみる分業構造の変化

金 恵里

伝統的工芸品産業の一つである京扇子は、他の伝統工芸同様、分業構造により生産が行われ、同時に職人の減少により分業構造の維持が困難な状況に陥っている。産業として、今後も分業生産が必要であるなか、京扇子業界の間屋や職人は製造の内製化や作業工程の拡大を行うことで分業維持をはかっているが、そこには他の伝統工芸の内製化傾向とは異なる点や、分業が内包していた問題点も見受けられる。

京都市における屋外広告物規制－規制執行者と被規制者の目線から－

宮本 徳之

本稿では、京都市における屋外広告物規制の現状・問題点を把握し、どのようにその問題を解決し、屋外広告規制をうまく推し進めていくために何をすべきかについて議論する。これから京都市の規制

地区の設定や違反広告への対応をしっかりと見直し、規制内容の認知度を高め、屋外広告物規制とは景観問題の1つであるということを事業者に伝えることができれば、行政と事業者が一体となって規制を推し進めることが出来るだろう。

カフェに対する韓国の大学生の空間認識～韓国外国語大学校・韓神大学校を事例に～

前田 彩花

現在韓国には数えきれないほどのカフェが存在する。なぜ韓国でカフェが文化として根付いたのか人はどのような時にカフェを訪れるのかという疑問を、空間認識を用いて解消することを目的とする。韓国人にとってカフェは第3の空間を超越した、家や職場と同様に重要な存在であり、生活になくってはならない場所である。

ビントゥル都市部およびその周辺地域におけるスクォッター集落－開発による拡大と住民移転の動き－

池田 愉歌

マレーシア・サラワク州ビントゥル県は、1980年代より急速な工業発展を遂げた地域である。本稿は工業開発に伴い発生・拡大したスクォッター集落の属性や生活実態を分析すると共に、近年実施されている移転政策の内容と実情を明らかにする。またサラワク州の他都市での政策との違いを考察する。結論として、ビントゥルのスクォッターは低学歴・単純労働・遠方出身という傾向がある。それが政治的交渉力の弱さに繋がり、他都市より住民にとって不満の多い政策になっていると考えられる。

大阪・中崎町の古着店集積－隠れ家的な街と店の性質－

中道 陽香

近年、大都市の商業集積地と近接した地区に、集客力を持った「新しい街」が形成されている。本稿の目的は、その典型事例である大阪・中崎町を取り上げ、古着店に着目しながら、新しい街の形成要因や街の性質を明らかにすることである。結論として言えることは、中崎町は「隠れ家的な街」であるということである。中崎町の古い街並みや狭い路地、また古着店の小規模性と古着の希少性が隠れ家的な街を作りあげていると考えられる。

富山市八尾町の観光まちづくりにおけるアートプロジェクトとアーティストの役割

御前 真琴

富山市八尾町では、伝統行事「おわら風の盆」を観光資源とした観光まちづくりが行われてきたが、過度な集客を防ぐため、通年観光化に力をいれている。その中で毎年行われているアートプロジェクトが、八尾町の観光まちづくりの中で果たす役割を考察する。八尾町の観光の文脈の中では、一見「おわら」と関係のないイベントであっても、観光客、ホスト双方に「おわらのまち」というイメージが意識されているが、アートプロジェクトなどで「おわら風の盆」では集客しきれなかった層の観光客を呼び込むことができる。

闘犬の観光化と衰退—闘う動物へのまなざしの功罪—

奥野 寛央

2014年に高知県桂浜にある観光施設の土佐闘犬センターがとさいぬパークと名称を変更した。本稿の目的は、この名称変更の要因を聞き取り調査や新聞記事の内容分析から明らかにすることである。土着の文化であった闘犬が観光化により全国的に認識され、1990年代までは高知の観光名物として活躍したが、2000年代頃から土佐犬が人を襲う事故や動物愛護の観点からの闘犬への批判のために土佐犬への「まなざし」が変化したことが要因と考えられる。

徳島県勝浦郡における廃校活用と「地域性」—体験宿泊施設としての廃校活用に注目して—

野村 美穂

少子高齢化が進む現在、全国各地で廃校が増加している。本稿の目的は、少子高齢化が進む中山間地域における廃校の活用を取りあげ、廃校を体験宿泊施設として活用する意義について考察することである。本稿では、廃校を体験宿泊施設として活用することにより、地域住民や宿泊客との交流が促進されることが確認できた。しかし、廃校を活用する際には、廃校の立地する地域の特色や歴史等といった「地域性」に留意し、活用の是非や活用法を検討しなければならない。

コンテキストデザインによる温泉地活性化の可能性—鳥取県三朝温泉を事例として—

武村 昂英

本研究の目的は、鳥取県三朝温泉を事例に、歩いて楽しい温泉街づくりを進めていく上での課題と三朝温泉が現在推進している現代湯治の取り組みに関する課題を明らかにするとともに、コンテキストデザインの転換 という観点から現代湯治という取り組みが三朝温泉にとって適当かどうかを検討することである。一般的な観光温泉地から現代に適した湯治場を目指すという現代湯治という取り組みは、コンテンツデザインからコンテキストデザインへの転換であり、三朝温泉にとって適した取り組みであると言える。

山陰海岸ジオパークにおけるウェブサイトを用いた情報発信の在り方に関する研究

笹尾 健二

2008年に世界ジオパークに認定された山陰海岸ジオパークは、京都、兵庫、鳥取の三府県に及ぶ広大な面積を持つ。本稿の目的は、ジオパークにおけるウェブサイトでの情報発信の現状を把握し、今後の情報発信の在り方を考察することである。ウェブサイトでは、ジオパーク情報の発信が積極的ではなく、ジオパーク全体として面的なアピールが行われていない現状である。今後、大学を介した情報発信を行うことや、連携の取れたウェブサイトの構造へと変化させることが、効果的な情報発信のために必要である。

災害時要援護者情報の収集と活用—都市部における行政と地域の役割に関して—

宗像 玄德

東日本大震災以降、「地域防災」や「共助」の重要性が叫ばれている。本稿の目的は、防災において重要である災害時要援護者の避難支援に注目し、現在、「地域防災」の多くの役割が地域に任せ過ぎではないかという観点から、都市部における要援護者の避難支援と「地域防災」の在り方を考察することである。本稿では、大阪市の事例に注目することにより、地域コミュニティが弱く、近隣関係も希薄な都市部では、地域だけでの活動にも限界があり、行政との連携が必要であることを明らかにした。

